續奥乃細道蝶夫遊

完

911.32
ソ

蘗野遊



鄕里誌

本

題首

蓋俳諧者自里巷卑俗之者言哉
以成章無所遺也於是民之情の得
而知焉則謂之省觀風之一亦何不
可也民人苟能采摭當言於遊歷之
處故苟不知杖履所被先昔蕉翁
遊奥而作貝集也彼民之情昭乎

如不語斯堂幸後人從事于技者
不為不留也然孰如翁之雅致孫
云民俗而無不書邪成年之春余
善北蕪山人拯奥松島行路之吟録
為續集于情自可見已夫松島者
異之大馬所勝地也山人濟勝是
務風穴就淵乃窺而探之亦不知杖

履所破云余見斯集未嘗不歎
蕉翁復出矣山人請予題云予雖
不習其技窺知山人足以踵翁之
武也因以是言元春爾
延享乙丑孟夏東都岱昌後





友人陳道之

續奥の細道蝶の遊ひ乃序

柳は紀行を帝が先生祖翁芭蕉の奥乃細
乃を慕ひて杖を千里に曳き淺香の沼に彩
を稱て其ひつゝを郡ね塩竈の浦に口を嗽
て其藻塩草を味ひ何る其那須野の夕か
其雪の夜る永野川の事に笹河の泊りしたひ
其旅の旅の時りの也又象深の美其奇の奇
ともいふべし紀行等稱にして無恩僧に殘
里自ら跡して蝶の何をひと有り帝是れ

續奥の細乃小に冠し其時所以其先生乃
和人念奥の細乃より起れるものにして其遠
より歸れるまで是れを忘れ翁乃何を後
志を報を以帝みすりし其志を續奥乃
細道といふのに見る人それ是れを案せよ

七富道人十無居士北斗新書

延享戊辰年
乙丑乃夏





自陽房先生之旅偽



蝶乃何そび

里枝古丁先生之

そゞ何神の物ふつきて心をくる無乃祖神のまゝ孫きり無て百物もまいつゞれも我の破れをつゞり豈の結つけ書て三里に美すゆるより松嶋の月先心しかけしと翁乃書給ひけるぞまとまて雷ふもそゞろ神のつき道祖神のまゝ孫き給ふや日比年比松嶋心ふかけしに漸く以前求て今年之文三のとし深生来の二百餘背負草鞋壹て白河の関越むとこゝろざしけるにことさし日和もう難く之

燕りしけふ注来をぞ　羽日なり

此度の旅無て友もかく又従る下戸もなし親き友のいひ何一体

まハ都ぐこの所ハ往来も無く用意用心とても独たもなし
かしじ東の方ハ所の様もいぶかしアアつれよりしも途のたすき
笈もをもうぐし負せてよりし又姫しいき事も了せいのれよりの
ふつみて野山のもの淋き御ともかりなんとすむそれもさるなれ
どもしや病なバするやうもいつぬ笈のをもきこゑハさのこ所いそぐ
まもいつぐひと日の中四里五里の様なりしにつるまも到じ身来
まして何るきもてけれハ風雅なるぐし野山の物淋きハ能き心
のためし者借むり独まて心にまうせぐこもいくこもすぐしりしや
アアつれてアアの姫ひなどせぐいか斗の心をやいつんもつうしの
雲長ハ干戈の中ハ千里を独りけり雲後関雅にて

ぶべきまハ何ほど雲も無く足に赤魚の物けなり其雅乃長
刀よく人を切る雲ハ株一本之笈に長腰を納れど此非常
のいましめのこ治れる此代所のいぶせき事もいつじ風騒の折締
誰かいつさせむ此独まハ志かじと見送れる人こと物語上野浅草
もいつとのなり千住の茶店ハ腰かけ酒ハて足より人こに別好
まをハ路ハ指ハ雲こ千里魂ハ消ぐ酒一巵といふ出しれ
ちるかまもけらべき所ハ又いかりハ御なんと此ぐれ心細く魂
消なんとハかしてもおらべきなりねバ酒のこ捨て独り其面に筑
波山雲渡川をえ鍋出るに似たりをくり見れバ富士の雪根迷
に秩父ハ三島の山を望えたり光ハ藍岸深でをしく見ハ

こゝに淫(ミなまつ)てかしこ以旬を吟じ〳〵けれど水神の茶屋といふ青
水の名物にて来も来れなむ〳〵これが名店にしつゝひ茶碗並
猿人ゝ水をつきなみ

散佛也も飯まだ汲ふ水茶碗　なさけ
御ゝ頁別ざけ手(すなに)荷ゝ茶邨　鍬が谷の駅大沢と以前
小庵かしてむ〳〵いふを掌に庵る河口しハ六十斗(むそち)なるが夫婦住
なしる家のそこ〳〵小氣もつき賓(まつ)しとも見えて名ハ源氣と
いふまゝ茶ゝてあし　いふハ江戸より立給ふまゝと同ふ志
志ゝ宮ゝ松鴻見むとて出門来日(いまき)もてるけれど此人もとしが
千里の猿立庵にあべるか嬢し足をとゞめぬといひて酒

とその人独りむり僕(すむ)しく河口じ夫婦もすむ妻のいふかけ
田舎にてハ酒の青ゝも多くべき物也足をもてるしりぞハと
三葉芹をむきりぬ茶に入れ出し

丁寧子心三川葉の　さうれ門　と笑人
バ河口じそれハ主いかの不自とも也てらまでも茶自附と云
河口主ゝりて江戸人もきしぬ雨ハ知り侍ぞ不までも皆法
なる人のもてつそびも客人ハ俳諧好の人と見えたり雨
も不自といふもの侍ぞしとて

海青やたしまでなかし志ゝし物　といひ
却ぬ宗教もよく切れ字も入りたれど本来しことに知さし



なり杜氏が遺構縄碑ちの下陰房鬼火遺と俗しも如く
の有さ毎もやとお詠て

麦畑や　誰がは桂乃国の跡　何ぞ
川といふに到れば歩行渡りし事も稀末夜渡る向ふより
る子のるにまとがり眠りく来る子は常に渡り別る事
尺えて川へ入て渡る子ハ川を知ずて眠りく渡る程に
るにやまつて膝をつきぬれば子を携さ毎に落ち水流
れば起ちるを川立ちてきのゝ去るまやまで夜軽
までも水にかりて危きるながら怪事なかりきおりしさ
浪を世に此子の軽毎國の守我ハ大家の世事は

人りまゐせ毎月ハ高上に職るが如く遊山翫水にすまゝらく
絶ふるの膝つきるに無ひぬうことしてきまゝ支より下野
の国栃木といふ家に知る人有りて暮ぬ何し案内して如流
山にけく水神川といふ處ありて足つまづき捨じ草鞋切
たり石ふ無き河原一足も行かたくいぞ甚むと云ども人里
をくり川をたるゝ作りのせん有なさに一るの水の古くて捨
るを見あて結身これに毎をりくて居し旅ハまことに多
しく面白くおりしく無有るも何んなれ伊吹山を右に見
やりて無が巣鍋山などいふをさき如流に到る足ハ佐野の
内なるよしこ大師の窟大日の窟観音の窟大黒の窟など

こちが岩宮御無き山之尾繰りて降り太平山にはおりて坂を登
れば和尚悠ことして来ゆまざこゝきぞ岩留くのつゞし點ゝ也し
て紀之九折なるをこゝしして登り指理清し栃木に降り右に
明れば室の八嶋を最清ふ木立かりて神さびたるさ面ゆ
殊勝ゝ壱ばれる本殿の内にいかなる人の作れるやめかりして池
を繰り池の中に嶋と覚しきを八ッ殊しかり八嶋といふ名にめ
でゝ遊し此ゝ遊久しき業とも見えぬおりしきるを撰へ
るものかれば洲神ハ木の花咲や姫まてましくなる往昔よ
里嶋を立りしまえなりハし作る事も

一ゝ通り室の八嶋乃無業こゝ也　と云ふ

いなけぞ山水の落ちる音濺(そん)とす故にはまして足ねぎの
路に山あるし

江ことを出りて来のわ来や瀧の音　卯月
朔のうへ衣かえて霧の

一ッぬいで背かし負かり　衣更　と呼送
まさに猿の身丸強のわ御如くのことし

股肉を御来に志すり　こうもがく　御山
御拈(ミやら)し信て瀧の尾清瀧寂光などめづり見水沢(ミまハ)の華屋し
到る此石田案の名物なるはし

卯の花の隣りも　白し　瓦腐岸　中嫌当

小到れば湖水漫(まん)として絵家の年迄黒髪山は雪いまだ残り
樹下は椒の花盛りと

残雪に黒髪山も　うすげかれ　と遇て
花蔵(けだ)の瀧を見(う)裏見が瀧に到る岩下に水をむすぶ入り瀧の
くしより見物の飛び丸をもつかして首長なれど絵がとし

極暑まてかして恨ぞ瀧のうし　茗沢
うんまむなとは見て雪像といふ所にうさかれる山のいてきよ里
漏出して茅田の谷に落かしこの岩その名に満りて碎けば殺
ほとり雪の如しよりて名とは見絵り大渡りといふ所にあり卯月
四ッ大渡りを立て悲怒(きぬ)川といふ有り水かき増りて橋落ちり

渡し舟を待て渡る船頭の家に留る日光まで人にいふ事ハ今度
来の刻までハ米運ぶる事く淋しきるもなし申の刻に及ぶハ往
来絶てなし昔ハ追剥の数多有りし事今も粉れ行きる
有れバ夏の内通ぶしと教えられしが千数川の毎待とて日ハ申
の前に成りぬ志かりて通まじきにも行ふ孫だ沢村といふ家
まで稀なるくかしげ菓鞋よく壱ふすき置け刀取出腰にし
かひしく身堅め笈をうげに負ひ笠着て始めたる押合け
眼ひしし株をいふやしきるもすれ目に拘置せてむと見えた
城郭してそこし目をくだり船頭に出し丸絡の身の仙もや
らぬ海之志かハ何れど危きを見て其備なきハ愚者之人を頼

者も郡書乃行鉢水見こなしてんと又内の心ハ羊なりた卵に
爪牙の威有りて形虎狼てバ誰れか容易に事ハ無きじ物をと
たかりをいひしてかくまをに世にいふ犬がしとハ是れなめと面をお
色吟しく遠いぞ笠を面八十里横或ハ廿里或ハ十或三里の家之
家もまぐ七しぐ木といふのハ木瓜をもなし大と署の打なぐいふ
ぞやもしてすくふのもなし窮の面有り有りし

蝶の夜姫斗し歸中乃日新名と如何
取りや有りたりへこしかり天竺に渡る流砂鍼といふ事ハ十三の
糧を包むと吟えし篠原の有様もかゝる事ハいと心細したりの事
たるふこる原山船頭山ハ有り見西殺まえ此歸に有りと吟て



罷りて山水の間にあて古流れ石埋れ今は見えぬことはいへば
の行る和までは到りたまへ人のいひ如く喩む物なれば今も
彩なし雞犬声絶て旅人一人も無りぬもとより山城の郡
も無し淑として太田原の駅に出て来る

蟷蜍乃 佐肆月おりし 独り旅 それより

古に嫌ぐ。みなじ。伏田小町。鍬塚。黒川などいふをあて芦野。板屋と
いふを通るお流まで換ぜし是のいまだいえぬ庭にいふ花さ出まて
白しきす浪なし和の名に叶てまたはいつのいふやゆゑ独おりし
いふは夏のうしき雲宮まれば那須山の姿を失るよりいふ者
後に雷鳴あて雨声をつくりの清水流てこよ這柳は田の畔

白雨ふ　立とまられぬ　柳しらん　雷雨

うき目見えてやうしらずり　白河乃関ふ見えて堺の明神の
おとうし　宿ふ作堺の明神と中ハ下野ハ　みちのくとの堺なり
下野の方ハ　玉津嶋明神　陸奥の方の社ハ　住吉明神也
かれこれハ　勾紫せしかどもさしも　和歌二柱の神神　西と
いへば白河の実　いかなるものをかて　神無事もけひ　又谷所なり
買うんやれ　たかりがてをそ　して　河もかさでぬかづけ
ハおとこ　きれ声ハ

雷が唖ば　笛ふか　実のおとうぎれ　明れ

白河の歌　界止と　いふ人を　罷て　ゆるさを　紛して　河ふ　西川

を渡坊向ふ　東の方へ　張ぬるハ　てしら　是と　いふ　はし　様が　是
と　又　並ひ　ひ　西の人の　ふ　様　咲　様が　是　ふ　是　れ　ハ　咲
さて　なり　静　様　有りとよ　ある　西の　はし　誰の　歌　を　知らば

青葉のこ　てじさしの　是なりび　と云
こして　祢の表　是　ありて　須賀川の　歌　雪　清と　いふ人を　罷　家ハ
しけるじハ　蓋井　氏　にして　雪子の門　人也　正風を　守り　風雅
に　富　様　人也　かれ　是と　物語し　翌るも　筆　を　備へ　ける　じ　ふ
孫　物　ひり　先師　蕉の　真跡　奥の　細居　ち　ふ　蕉の　自　畫
賛　蕉　雅　吟　一　家　仙　蕉　ちが　筆　我ハ　与　法　老人の　筆　雪子　自
畫賛　松風　筆の　蕉の　縁　ち　ふ　古人の　墨跡　無　く　取　ぬ

鶴志まり むま白しなれバ今の若者ハいづちへかけれむ見えバ如此
かしき国見て髪とりつけ法子をすし恥しき点して胡飯志
てするもをしくかゞしかりきかくて母をなして二本相に居る
つてら根無ゝたりしそびもまことにみちのくの富士といふ銘
の姿すそのりしき面白き山之あまたが原もをれバ黒塚を覆ぬ
佛へ雪しハ岩屋さえつけて日月の光をかくし洞口苔深く鬼
も住なむつりさ雪明りと呼しすさまハつしでかの木立有りて切石乃
檀のやしなるかゝ三ツ有るのゝ之陸奥谷取郡黒塚といふ和り
重之がいまと尼と呼て住と呼て平兼盛みちのくのつらぬが京
の黒塚しおれこれりといふハまことかとよこしかの尼の住る礎の跡

なるよし鬼沛尼の通しるをつやまりる呼て夫より伏拝ことゝ
不到る足ハ昔は行りあさえて海之よりて住吏の浦住吏乃
海土などよりて信吏山ハ海中の鳴山まて黒沼の神座跡乃
地にして又神黒指明のさせ給ふ此神を拝する者海を渡らぬ
此所よりかしおがむまぞ不の名と呼ぬと里の老人のいふ所に地形
さもあらけし住吏山の鳴なりといふまぞかの思て通ふ尼もかれとよ
こし呼しかくて福鳴といふ所に入り此所に庵備らむと求るし人
のをしなるハ此さきに合神屋東四郎といふあらうしくの如きに神
の庵かし侍る罪給へといふりて見れバ庵をなしぬ木糧の代
四ツ料に及びぬといふさきに僧ハ人廻国者ハ人泊りたり此僧



小図ハ足ハ法施菴之敷ごとき者料なして菴し侍るといふ
是ハ浮屠の行鉢なるべきと思へど草鞋とき笈休めし好
なれば又もかゝりもこゝしてあるじ又見之敷ハ松鳴一見の行鉢
なり仮名の為に何なれど木糧の代取りて給れといへどあるじの
と云へ行鉢ハ我なりけるといふまでさもあらばこれと泊る時にて
志のぶ山小の浦る山の末に草刈童の多くあるじが並ぶりた
るも有り又時なりけるぬぐひまで刻てこしも有り
志のぶの書草刈の頬かぶり と云ひ
ながら登り指現論して足よりさぞ跡といふ刻る醫王
寺といふ有り佐藤庄司の菩提所之義經の後妻女が書

字の鐘作義尼の出雲の鐘など有り作義父子の事ハ言ハ大尺斗
幅三尺斗ゝでの長く文字見えず是より庄司の館の跡有山といふ
を見て飯坂といふ所に有り此所温泉有り其の痛も可ゆゑ也と曰
かさ日浴しそれより舊の松原を見る松原ちとゆゑし美英僧
都の墓有り　世の中の人ハ舊の松原とよびすてるぞう
ましうりけるとよみ給しかの谷所之桑折といふ出て高耳といふ
人の風雅有りと聞て尋ぬ可ゆゑしのけふハそこに泊りてよとぞめ
られ侍れと日もいまだ正しくいまだ殊に此日和もつゞきたれば
無くふ雨も有也先所松嶋急かれ侍るといへば可ゆゑし
こゝ晴れてともなりしまゝ　財寶　といふ

ゆゑさうなくばまるやしと細て去る此所に義松嶋の姉の時
風流のたゞしめや奥乃　田植うた　といふ
短冊を出中にあて田植塚といふ有り此塚を到り
風流乃　植やさく乃　田植塚　と書て
塚の前にさしをく是れや俳諧の可ゆゑ神とも可ゆゑ
後田貝田の歌さて乃の塚の景の上に無量が視にせし石といふ有り
大いなる石の上に硯のやうにくぼこて有り其天氣水風にぬいて
夫より堅くなりて塚の有山畑の中にてきき九尺斗枝葉なびたる
昔鐘有りて是に跡しき松有是を義鐘の臨居松といふ本の元に
義鐘の小社（かたし）有り夫より伊達の大本戸の跡を見ゆ有りの有ハ此尺

春ハ見えぬよし如と以前のやまして毎に鳴侍る

玉川や子春の留るをばやうしし　と知て

おりしたるに思ひ出る塩竈の浦の笠なる庵も見やすひ

明神詣して風象を詞

蝶の向きび上光終

塩竈本宮の記　英　象深著中同著

そもしは塩竈の浦ハ松濤ふかひつゝき投桑第一の英系

なり白玉の緒絲の橋とよしハ六社明神の家ふ是なり明神ハ

歯田第一の社之木立なり神さび石のきはたし百年に異ひ

楼門いよやうし梅廻廊ゆるくめぐり社檀目もたくかゞや

き切れる石の中徑ハ糸して川が如く二面やうなる数ける石ハ洗

つる大石ふ似たり石庫銅の燒竈数も知れぬ中ふも和泉三郎寿

進の燒竈無形輪塔の如く聳し傍には社家社僧門を並たり

棒無民家形をつゝねて子賀の浦ふつゞく民家のうしに明神の

器なる塩釜有り牛石有り千賀の浦より毎日あて傳ふを眺

与するしまづ右の方にあり却るハ寺が磯 枇杷が磯 小磯ハ毎夕
天の三路見すゞめ磯かしす磯 卵の重ね何れいかなる花鳥(すゞめかしす)にて
名とはありけむ松が演 雲が浦磯とつけバ月も何やあらはみ津
の小し田ハいとちかき磯也 籬が磯ハ明神の社有り何けの名所
こゝ居ありて松の方より何れ方丈なき風景之鏡が磯とハいづれ
の人の面影を移せしや 内裏磯 仙洞磯 女清じ田 恵海 磯也
つゞきたる也 いづまの景はかづしかなる名ありけりかぶと鎧の名なる
磯也 演軍などの有しや 恵ひす大黒布袋びしやつなどハ
磯は風雅にも何しぬ名之 たゞろ(ふくら)磯といふハ菓も木もなき也
の鐘の磯 鶴日磯 法浦(とくら) 福浦といふ九ツの山田 多海磯也

篠磯ハ並ぶ二ツ山田ハ多きありて屋風磯ハ通好 唯声磯といふ
きうの海士の何ごとよみるもやつが磯 宝珠磯 五大堂ハ渡行を
蓋ハ明かに松し田の橋といふ也 霞が浦も引たえてをれし
姿のあらびたれど合けて小松磯といふで付けしかん 魚が磯ハ魚
の形し似月見磯ハ國の守の別業有りて秋の深めかれば魚
魚が磯ハいづれの所をや見く霞が磯の伸やうに地磯とハ身の毛立
やうに法師磯ハ其を来が浦ハ其をしき罪や作りかんこそお
ぼゆれ梅が浦竹が浦を名にめでくるその浦の浦波ひすぐて本
七の山田平八の浦三千一の磯雄磯が波のいその浪松嶋の松風はし
ゆ汐ハ嶋し浮が如くしかる汐ハ沢が如くしかるハ如ひ

のべ、いかゞ、おもふ、こと、きゝ、ものゝ、ことを、ひとつ、ゝ、あつめて、一部の、ふみと、なせる、ものを、ひろめ、あきらめ、ぬ、ひとの、ために、ものを、かたり、ものを、かたる、ひとの、ために、ものを、きく、ひとの、ために、ものを、きゝ、ものを、かたる、ひとの、ために

のうちの様今を盛りと咲みたれ南ハ色の海たるふ遠く面
をむやくの実となれ東ハ秋田のうよひ路海水ハ堤つ
かりたり江の中六里余風景又あるべきにつゞかくの和ハ楽
来にかるものゆゑ此ハ雨が雨心も雨雨心ハ雨ぬやうハ
此れ南花の蝶と明りて極る雨も又蝶ハ也
象深や雨が蝶々乃ひそひ所　千満（ちまん）
孫（ぶ）寺のうちに其の所ニ戸の枝れ雨がさすがふさしたるも
ひでむぐらなど青り合たるハ雨の雨ハなるを
須む人ひんなやしゝ雨系粉の雪りしひりしや茶なども如ハ
云ひてむと門ハ入れハ渡りたるとも見えぬ庭の雨松柏のいと

大いなる青げきり量極のとくしれ青ぐり泉水ハ杜宇
ひや見えひくしく蓮のいと清げハ光る葉の似もなき不ち
さし出ひ百ひり又岩のうきなれる雨くまハつゝじいとくれ雨も
梅さくらの本梢々の香を何しをひらぐひすの色の呼え鶯
又青ぐ之廣き方乃柳ハ尾花の穂ハ出て外他の花を
いさぎよし雨日小ぶし山ぶしなどの花かつりすみれ花の
この花げハ咲なし芭蕉葉の処やうハ見える深ハ廣
ひり形ハ葛ひさぐ海這まとひいと妹繍なり椒のたしハ
より葉色すれバ漳字刻きて年の穂の旬余りと見ゆる
僧のいづくより何の用ひりてと問ふ足ハ松宮象深の名に



うかれて行鉢する者とたぞとの史給しん為といへバつくぐ手
見てやすきなる菜も色あらバとなるまで焼しく笈極にさへ
たぞと寄らせ菜のこて体に僧の向にそとまいづくすれど飯ハ
むさしの江府と言に生國ハいづく生國も武江志かを
金城の内に産ほと言に僧の以武江沸溝内の産あらバ武
門の生れか志なり僧の以武門に生れて今何そ世間強行鉢
の辨にして腰に毒力なく笈背負廻西順禮のごときにあり
さ毒なるや市が曰志なり飯文武門に有りて小笠原飯に住
飯も今の飯に生れてやしきなり十三の年始て承弁飯
小住に翌年小笠原の飯に御住故有りて好小笠原飯を

分れずんば仕をやむるまじとそれ土の行は足丈夫にて能をのがれ
るにまさかり一陣に進ミ一番の鎗をたげむ事あり耳をかく
ハ貝鐘の制ハ眼ハ旋旗分れずしてハ何事切をなすむ
やとかくに無病にて殊に怔忡病痛の事ひ何人ハ仕官ハ叶じと
いへども今の世治風なれバかく者りても語られ何とぶるや寒痛し
痛のしれ懷嫌などにすけられ潔く一日の暑を勤め雪などの降れば
やがて虚病をうまえ火燵に禄をぬすミ痔漏の病を持てる上
のかぎる事ハ又年なくぬりもてりき歩りも心にまかせず枕し
すかりて禄をむさぼりさぐひのミ為しを恥人を抹殺する事ハ
偶然なりとやいはんこれハ戸位素餐の徒之今そこにいふかくの病

なんにハ仕をやむるまじといへども先の侍をなるにさふをどれり
そこの心無病のこれハ何しもりも大丈夫の世に立る仕ては
宰相も到り入ては取るに到りて人を制ぶべしもし
志をはぐして人の事にたえずしまくたるまじ今そこにも
志をはぐ者しに弔が曰君見ぐや群風の醍醐に處する魂
墨をはなりとして何えて出ざるもの難湯の死をまぬかれぬ
いつりこゝをもつて取れ

禪師 いづ法しらしや 皆のまゝ と云
を叶し呂宋の餌大にてかんだしき時ハ大魚足をたゝ餌
小きなるをバ小魚をもといへり此大小の魚これに厳じる餌

をきむが思ひて庵人のまへに屠る生何る者餌の為に命をなす
ゆさぐといふ事なし人各業有り農を耕て食し工は器を製
して喰ひ商を交易して生利をなして養ふ所は此士のこゝろなり
なし四民の上に居て令を出し生民を制ひ何ぞ不足飽まで行
喰ひ妻子を挑拂し桂山逸栗に身をゆゞね足らざる民
をせまく足ハ大いなる餌をきむ大魚中魚より小魚に至り
これらに應じる小餌をきてみづからいはじとせひ匍匐庵
に鞍ふ所をしりとしても制に應し戦場に命をはこれに酬
もなき人と母をいふそひ君に命を落ひ此時に至て命
を惜しし悔えざるハ何の思ひぞや常に君より祿を受て妻子

を育ひ諸命の恩を受るが為之足則平生の餌を喰ふが故之餌
の為に命を高ふるに無ハゼじとしへば僧の曰吾子餌の為に命を失
ふのこゝろ得ん忠と義とはなきものをもはれとは今帝が曰忠義のまゝ帝
も知りたり忠も義も人に無すゝめと知へば僧もまをさいて知吾子
が如きものハ億病にも望む又無理にもいふべきをしるものゝ風上にも至
はじはれと大きに知ひさてそこの海を見るに尋常にいふべきなる
ぞれ同帝が曰髮を刺しざるハ刺刀のむかしき也之髮教の為なり
歯を深ちるに歯の性弱き也之髮刺しぬ也髮世界色如此なる
人も又何り歯に鎖ひ付ふ人もまゝ有り此事を知らるまゝ之
ハ今も一つく命て見ればまゝ有ふ事も遂にて吾子歯が門にのりて

をもむかせて庖人のまへ屠る生何る者餌の為に命をなす
ゆゑだとつまはし人各業有り農を耕て食し工夫器を製
して喰ひ商を交易して其利を得て暮らしは此士のこゝろ
なし四民の上に居て令を出し其民を制にしてかゝる飽まで
喰ひ妻子を抹殺し桂山逸業に身をゆゑ見るべきなし民

雲雀より續て郁續を来むといひしがしむで也ち秋に走
すなれば此番が門に入るとは雖まで此やと思ひ番れは足挑まるとと
なてそ先師芭蕉翁まで書しくるよりかきかゝる所に来り
まゝ見えなるすまで有難なれ新くは正風の所ほし第りさいと云
翁の日吉来より雲雀千に續へし如更に著るほ今の世人かしこ
しすぐれ恐といへ昔の上手より句はさくこなりその道に會ふて
なり五七字の文字人會れば点を取れ續ゆすべり判者とても此の
温奥を知るはすくほ花鳥風姿風情曲節力誼作字眼
なども無くば句走の面白く工なりて前へよりるやうなれば却て前
句の心をくぶく句そも点をかくるは道に首切れと云ひ云

点をかけて判者もなけしと番門に何ぬ人の世にすはすべにより
こゝ拙工を何の番れは知らずまり尚世の如きを此に會席二三度も
出て点取に續ぬれば番とおこり人の句の旨意を撰ゝ点帋を拙
他の句を活墨に番が徒まても牧馬の中に点取るはすくほ今
の世足れは雖が門雖が徒なりといひて世に於る者道番が門なりと
いふ人も無ければ恨に雖にすりて番が門に入りし人もすくほ今は来
の徒に番が終に見れも此も知ぬるを番教しやうに書ほ云ほ
もて拙しく又番が徒にいひ教え書續えるまゝも今の書を書
いひ達え又番も知ぬる書ほ云ほしるまゝ道足れ世の命かし
こくなりけにつき番が徒の中にも知し工夫を知し詠しさるを云

かし書には延喜の式に、年ごとに、漫遊する歌、舞ふ遊子、舞ふなどいふ事あり。今、本体七ヶの歌、花夢、夜半風、曲節、真玉、皆風俗古風、音通連声、新旬、琴旬の歌、式のかうした歌、今、本体のかうした歌、通のこと、琴旬、琴旬、琴旬



さしバ蓋又章ゆるべし亀深にいまして御しんにハ志じこ仙基ニ
出て芳妍と云人を君ぬとゞめられて晴山と云人の許に宿る無有
朱滴耳流貞線角蒼乃角などゝ云人ゝ来りて如此に立國
と云人ゝ武江水國門にて演所の辺に住めるが去りし秋より羽州の
坂田に行き亀深に極で御ることて此所に至り此人も来りて始めて
無双同し武江の人に故にそハ知りて子里の旅宿にて逢もしぎ
二ツ仙有りき一所にて略に

面白し花ちちなり　知ひ都　北斗
雨にもなしで　浮ことを細　芳妍
能い御子酔　幸りめり　遠ゝ　朱雲

る耳子の許にありくいるじは比金津にあり爲を之子息此風也也
出遊へられ爲に可貞可則錦葉などいふへ爲来風雅の物
語に夜更しかりはいるじの亭を檻翠(うんすい)と云正徳の比より待
公連卿の好士は京に遊書風意をのべて正徳集といふは夜のあ
姉は京に當りは風意を見は集を閲(けミ)ゆる風雅の妙也あるもや
しくつゝあき事を弥さまゝ心ぞいるじの爲をあれバいくどといへど
此風のあるしらぬ爲さまゝまぞやそて取出し

檻翠軒の記

何く檻翠の斉なる春雲樹末の雲を踏て上天にも登る
べく秋雲池水に月を移して京女の心をも伺ひつゝし松

柏蕙(うんぜん)にして温飽心(うんぜんとこゝろ)を知しく水色澄(すん)にして安良
葉田栗にも又可之直下三千尺澗水眼を射てまゝし
軒端にし蛍の瀬や苔の水
野倉色幽に山姥も絶ぬべく小徑屈曲して桃源にもあらぬべし
仙人の足をまぎれぬ苔の花
此書をしぬいるじ爲をあれバ旅舞をとゞむ
お爲をともいたせぬてくあり鶴の
たちかむけ
耳をまぐしあ免をさぞや一夜酒　可貞
まより五十目(いがつ)といふ事ありて給まの里文字摺の石を見
ぬ足ハむりしは事ありて貧しき僧有り母あん一人ありしにまづし



一声をもなかやし旅の泊をぐる
　　知安
　　
　　
　　


五大堂より
見渡す家
五大堂

虎耳草の也りし西ゆて　緑森ゆれ　北斗斎
曙　言歸　好　雲の中ふぐれ　晋流
一面ゆし　無も　梓　家もうかむしゆ　芦葉
言ゆしこまゆて　山もちの　むし　亀
三吟の前仙有り　略に日数なまて　卯月　廿日　いるじにいと　西宝子
晩の鐘ゆ　鐘別　也り　清れ　かゝ　新泊　晋流
江戸までは　此曙也　雲　木立　晋歌
掃　ぐき　笠ゆし　海也　柳の也　芦葉
かゝて　白川　界止の評　刻る　此いるじにの　新氏にて　鑿を業として
名は　玄道と　いふ　術きて　言上の人之　我国をさけて　此地に　隠る　夏雅

を業しめる人之　笠をうけより　泊れの心をひ　子嚴の　知音の也
こゞりし　酒ゆし　青調　ゆゞあてどもて　言好　生（さゞひ）に　梅に　雪也　語る
卯の也也　梅とけても　白い也　界止
新茶乃　餞　知る人ぞ　知好　北斗斎
いるじに　梅の　白　有り　折かし　床に　百合の也の　投入のうち
森て　見れば　いよしよ　也　百合の也　北斗斎
蚊屋のさてより　破れ　窓の　風　界止
足より　前仙調　ゆ　折かし　いるじの　前　結むとて　善法の　いそ
がしき　中へ　来りぬれぞ
善法場へ　大工の卯の　小雛　氣　北斗斎

此屋ようもさがさむ陸奥のおのがうち　界上
ことの有り有数多有りし略しぬ詞じを今日唐と云事歟
記を書て遠さまれ

今日唐の記

今日しことにて今日すでに今日唐に旅寐にいふて目
のさむるまでは明るのを知らずに明けて又今日唐とそれとも
のゝ目すり口すゝぎ飯喰ひ茶のみて地詰し知るまで
れが笑ひ感ずるまで有れば感ぬ多くに称そ火の目を見
事かけに酒又酒しらべ青ハ形かしのみ答にまうせ
志をしてはるまでいふじの心かしの如しきの事の恥を悔ひ

今日のゝをつしむ為て明るのをたかしば感れも旅途
の中に遊びて今日しこゝにいふじも今日しにして今日唐の
主人なるの恨也

有り切りし　橋井　いつけよ　五月雨

いふじの庭柳に四つの縄を有り　帝　飯れに名石つけぬ

其一に亀甲石図魚平学の大石修理として蓑笠手法
静なり甲子に亀の　はてうち

其二唐門鉢形木瓜の如きを上に水器を設けて下
一魚に見しまるに見れば西湖鐵塘の鉢の門に似たり
次れの下を見ゆく　すぐこうれ

其三地潜蛇とも此の用をなしたるの言きハよくもとく
照るは蛇や地を去らぬるの苔の写りなり
本下（こさ）ちき月の加繁や　石蛇菴
其面斉皆松本に蔵存た右有り　此事や根を蔵に匿
木梢なしろに向ふ後則蔵まへ又ろしろ
雪のせてこれがくたやこしろむき
とやうにして日稀りて有るに限りぬ有り雨の夜もなれば晴れば
何るじ不いと雨をふ何るじ筆を取て
武陵府の渡明松浦の海の所に雨を見ぬ一日子達のなじこ
まとをいかる周縁なりなるぞや二五日の宋詩皆清古刀となり

何まさ小鍋立の頭向まて先（せん）を取れ無念ことさ内又後
よる雞よとのせんさく折れ　蝸庐の縁ふいとやうほしく心とめぬも
既に強いすがりて再度を絢せむとすれば歌ゝ年なし
別源和燈下示君馬與船老軀難再會只詩一書篇
もを會れ筆も雅織もさこぶれぬ
奥州白河隠醫　今日庵　畏止
滞留せし内接舟といふ人の許へ一夜招れ合せし人に通し
又畏止の許まて逢見し人に恐彩柳窓沾歩などいふ人に
何れの私ありし中立て白河を立ぬ折れしの青お海に雨の
そ夜も何しく一日の中やうやし二里三里もむりしく晴れ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寺解(とけ)て休ミ思ヘといふいかなる佛の濁世の塵に示現しかゝ法華門
先食明礼の如き人をたすけ給ふまゝとなりしのすゝるに心をとゞめて見
るに唯無智無分別にして正直偏固の者之と有り祖翁の嘗せし者之

一 うつくしと我　奥の細乃ふ日和田の宿をうて浅香山あり路より逆
じ行ふに沼逸しかつゝ別比もやをうなれバいづれの事を花かつゝといふ云
かゝ人ゝに尋ねども実に知る人逆沼を尋ね人ふ問かつゝしと尋ねるき
て日ハ山の端にかゝりぬと云給し

一 あまぶ原黒塚の事　手之がいまとの尼と呼て住す礎の行と手治定し
てありと又其先生ニ而到りし時まき堂門者なかりしゆへ岩屋見ばふ
なりなあよく知れる人のいふそれより眼の網の中にて七八丁或ハ十丁斗づゝの

大石をいまゝつゝ上げ其下宮のやうなり人の二丁ハいのしゝといふ

一 覚英僧都の事　西行撰集抄ニ　そのかゝみちのくの道さそらひま
かりて侍しに信夫の郡萬の松原とて人里をとく離れる石侍り其人
ハ山なもなりしべ又新ふる地ともいふべかしき宮の見えて本草にしかゝて志
げる清水里に流れちれり世を望かりしのすれて此ゆへのなるに住き
細ふ見え侍る澎奥ニ而に尋到りて侍るに松の木の志げれるまゝに行の後と
麻の衣を掛て其身ハ三まかりぬと見ゆる不有りいかなる人の行かんとま
づかりしく見えて見るにそぞなる松の木を削てかゝ書ふ昔年應理圓
宗の学徒として公家の梵筵に連り今ハ諸國流浪の乞食として鍛
工を萬の松原に有る　世の中の人ハ萬の松原といふ

ぞ嫌しかりけれ　千時保元二年二月十七日推領都　覺英年
四十一申の刻に終りぬと出れたり此僧都ハ後二条殿の御子宮殿入
道の御身まで有る　其をのこそとしを別るゝみよし野木梢に落る有
明の月と云名家よく給へる人にて一条院覺信大僧正の門弟まで住給
けるが此年廿余りの比夜儀に無心してさがかりをさき比をひ小神ぬぎ
捨つまゐる物斗まで何地とも人に知られで餘出給ひたりけり其行末を知り
まる人なりければ君なりに及びて此十箇廻雖り定て年を送り侍
里ぬとなの如に弟り侍りきとも諸国流浪していまてかりけるが此所まで
終り給ひたるにて其後にも長れ共見侍る一寺の貴重にして三子の
禅徒にかしづかれ給ひ其人の名利の志をかりすてゝ人に蔦の松原に

嘆て名を心に志めて宮期の時刻まで只元給ひたんかとしけるまは
何ぞやとなり

一　かゝるの前一条の院の御宇蔵京寮方郷長禁中にて行明院とあ
らさひるにして行明院の冠を笏まで打落給ひしにさぬ御まで冠
をとる婚りき合せけるをもそとなりで是ハいかなる過にか乱冠にのひゆや
らむとゆさせ給へハ寮方いしへんすかしきにて立給ひしを主上ひそ
かに御覧ありて三の樹見てしまれとて深奥へ召されしかすぐに百日迄
されざりけるとかん寮方名取郷此笠嶋の所祖神の前を通り給ひに
所の人の告ていはるまゝ下るとぬの志ありけれ者如義川の西一条の
和和雲殿の所祖神の娘密に商人に通(アヅセ)しきへ此所に設れ其

まうり出雲の人毎年しゐる者必異変有り中村にも下つ宮にて海潮
をゐり給へと祈りぬるを中村さてハ下出の母神とあんぞ下つ宮ぞんやとて
己が社に示給しるの例れて其夜もやがて無事にて終に此所ゆ
まて死し給ひぬとなん社の浦の名を漁て下つ宮とて石を三ツ拾ひ
取て有り中村の嫁ハまよりおぢくしりて地手村といふ所に有り西ゆ
出雲に来り 拾遺往来 打ち寄せ名所をとぶ無て枯野の荷篭とぞ見るとよ這之
一 緒絶橋 續拾遺集 白玉の緒絶の橋の名もてしぐれて落る神の涙 定家
一 六社明神 地竜大明神と号 右宮武雍槌命 左宮経津
主命 別宮猿田彦 塩筒 長狭 國勝 言勝 大田命 猿
別宮合祭るとぞ或ハ地竜祭神一座味耜高彦根命なりとも

一 和泉三郡寄進の地竜ハ内袋鉄之屋敷石廊ハ銅之宝塔乃
やうに見ゆ廊に文治三年 和泉三郎寄進とあり
一 地蔵四ツ一ツハ御り四人余高さ五寸斗三足有り外三ツハ御り四人
斗高さ八寸斗鉄之 一 牛石 町屋のうしろ 牛石頭して四ツ
有り往昔明神の地を運び上牛の石なりしとぞ今ハ土に埋れ外斗見ゆ
一 亀浮ハ形如之 一 西方の笹の橋 西方ハ此所に延附ものこと鎖
とよこ橋とよりて西方の笹とぞ 一 多の海 勇将の界むやくの
実又ゑもむやの実とも ものゝぶのいづきにまれ出さるすとも
やくの実とよめり 一 二十油珠 大国主家苔神切后家三韓を退
治賞ハ時神二十珠油珠とて二ツの玉也さてハ此玉ハ此所に納め

月出
世を
のれる
籠の

裏杖

裏杖ハ杖ハ婦の名之杖ハ籠の縁也 [illegible]



一 [illegible] 足ハ右勾の選ニ [illegible] 字眼 [illegible] 杖之
[illegible] 一 [illegible] 一 [illegible] 一 [illegible]
[illegible] 人 [illegible] 場 力を衣 [illegible] 意氣 飽 押情 [illegible]
掛 右ハ西之ニ [illegible] 八 [illegible] 白 [illegible] 寄 志 [illegible]
走 足之ニ [illegible] 千眼一到 [illegible] [illegible] 鉄場 [illegible]
[illegible] 場 ニ [illegible] 五 [illegible] [illegible] 鬱 [illegible] 苦 志
一 七ケの姫 [illegible] 所 比情 走之 一 [illegible] 一 [illegible] 十曲節ハ [illegible]
一 [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 北 [illegible]

切　志バしくまゝ、あれも迎る　蛟やうれ　仝
志　入海や　ごこ　吹寄す　あきの風　仝
一皮肉骨　たゞ形ハ二句を席破点ありさいゝ　へ　志ハ
皮　湯豆腐と　麺面　さざまは　時雨れ　仝
肉　豆腐屋ハ　人足志けき　しくれ　仝
骨　豆腐　壽かし　荷で　麻布　しくれ　仝
一死活を　句の死といふこと　一音通ハ　アイウエヲ
一連声ハ　アカサタナハマヤラワ　一親句ハ
正親句　立別れいまぞの山の寒にする　松こし　雪かば　今鳴うん
窖親句　天下　皆酒屋ハ　雨れや　世の日　北斗

来鱗ハ　形朝ハ　いくさ也　名　百川
聖廟　法楽
智　松尾の　白ふ扉也　演乃　美
眼　笛ぶきやうし　沖手洗乃　蓮
其之　おげしき　龍也　家老ハ　拠りて
一跡句　老女の世をおりしを　弔姫
稲妻也　さる間　長年　破れ唐　北斗
一式の事　宇佐　罕四　宇貞　源也　七十水俊
百貫　十百貫　千句　是木の句　数月　世の事　或ハ奉納
法楽　彩徳　美也　賀　婚徳　元服　稲徒　追善

右之外、御法式のごとくにて、生うる物を捨てしより
一年ごとの　今額宮前と云ふ所まで
右のごとく路

江戸より他屋形までの乃中名所記　附二十八里

▲府より人の多く往来する事を記す。▲事を略するに・事を略するに

十無居士北華誌

●江戸より千住へ二里・九十一・七十●千住より草加へ二里・八十六・七十八
●草加より越谷へ二里・七十八・七十九●越谷より粕壁へ二里・七十八・七十九
●粕壁より杉戸へ二里・七十八・七十九●杉戸より幸手へ二里・七十八・七十九
●幸手より栗橋へ二里・七十八・七十九●栗橋より中田へ二里・七十八・七十九
●中田より古河へ二里・七十八・七十九●古河より下総へ渡る。

江戸より千住へ二里

千住より草加へ二里

草加より越谷へ二里

越谷より粕壁へ二里

粕壁より杉戸へ二里

杉戸より幸手へ二里

幸手より栗橋へ二里

栗橋より中田へ二里

中田より古河へ二里

古河より下総へ渡る。

●千住より草加へ二里
千住より草加へ二里

●草加より越谷へ二里
草加より越谷へ二里

●越谷より粕壁へ二里
越谷より粕壁へ二里

●粕壁より杉戸へ二里
粕壁より杉戸へ二里

●杉戸より幸手へ二里
杉戸より幸手へ二里

●幸手より栗橋へ二里
幸手より栗橋へ二里

●栗橋より中田へ二里
栗橋より中田へ二里

●中田より古河へ二里
中田より古河へ二里

●古河より下総へ渡る。
古河より下総へ渡る。

●江戸より千住へ二里・九十一・七十
江戸より千住へ二里

●千住より草加へ二里・八十六・七十八
千住より草加へ二里

●草加より越谷へ二里・七十八・七十九
草加より越谷へ二里

●越谷より粕壁へ二里・七十八・七十九
越谷より粕壁へ二里

●粕壁より杉戸へ二里・七十八・七十九
粕壁より杉戸へ二里

●杉戸より幸手へ二里・七十八・七十九
杉戸より幸手へ二里

●幸手より栗橋へ二里・七十八・七十九
幸手より栗橋へ二里

●栗橋より中田へ二里・七十八・七十九
栗橋より中田へ二里

●中田より古河へ二里・七十八・七十九

ツノ井といふ　●山田を出川とゆきて渕場八度り渡ると町のこゝ
大松の並木の西輪ゞ巻とゆ　●中田より右に筋違山
見松の並木尽たりゟ橋渡ると小山の到るのを見ると二股に
渡ると又渡りて松並木日向屋の石碑有りとそこ　●右により脇本
十六▲廿四丁・十五　町ゟ西の城門形改ゞとゆ　●新屋の巻有りとそこ渡ると右
膳の附家ゟ西そゝを折て出そをゞゞ七ゝ家そゝんぢそ右ゟ
とゆ家ゟ金ゟ改ゝそを負ゝ清出をも神ゝ山ゟ到りさゝ
百ゟ則千家ゟ神もと今ゟ牡蠣有ゞ堀ゟ高ゝとゆ　●鈴木より低
十四▲廿三丁・四十八　乙女の家そゝ江ゝ人の西場有り　●低田より小山ゝ
田ゝ二▲廿三丁・四十八　乙女の家そゝ江ゝ人の西場有り　●低田より小山ゝ
●小山より茅ゞ新田ゝ一り▲廿四丁・十九　家の左りゟ下野大塚改芝堀海有り

左りの方日光ゝの追分有り　●茅ゞ新田より小倉井ゝ二十▲廿七丁・十八　●小倉井
より六穂ゝり▲廿八丁・三十七　小倉井とゆ井有り　●荻ゟより雀の宮ゝり▲廿五丁・三十七　鹿沼
ま・三十七　小倉井とゆ井有り　●荻ゟより雀の宮ゝり▲廿五丁・三十七　鹿沼
訪之　●雀の宮ゟより宇都宮ゝ二り▲廿八丁・廿二　雀の宮とゆ有り　●假東鴻
巨山とゆ義兼の墓とゆ有り　●宇都宮より白沢ゝ二り▲廿八丁・五十三　正一位
亀一等日光大明神の社ゟり　十五重ゟ　●白沢より氏家ゝ一り▲廿七丁・三十一　鬼
怒川西渡ゝ　此の渡江戸人の西場江戸人ゟの附ゞ並ゟより西ゟ有り
古河の脇まで乃ゟ有り　●氏家より五連川ゝ四丁▲廿五丁・廿七　横野　塩屋の里　湯の山　松山　七曲村　江戸より廿五里
ゟ名産有り　●五連川より佐久山ゝ二り▲九十二丁・廿二　町谷川より茶ゟ川　茶渡
横野とゆゟより山乃ゝ　●佐久山より太田原ゝ一り▲三十八丁・四十　伯耆ノ有

那須原●大田原より鍋置へ二リ▲百二十六町の中に出さび川と云番橋有り
上野平 大木ずゝ みまじ 一の沢 祢りの木 沢田小町と云 沼 むざる
鍋置川●あべ置より越堀へ六丁●越堀より芦野へ三リ▲百二十六 杉にて戸
一本柄と云坂有り 寺子 寺子川 石田坂村 まて川橋有り 地沢
だんや坂 黒川 茶屋有り川を有り こうしじ●芦野より白坂へ三リ十丁
▲百十七 ●七十二 底根村 此所に極り柳の鏡山と云山の麓に清水を面り
是のぶ清水源を柳がげ売しとて丁寧立と云りつれ 彦の方棚倉の
間に有り矢溝山と云山の間に田分石とて常野奥の堺石有りとぞ
棚倉一名ハ赤館 此地上遠野と云所に名古曽の実の所と山上り
碑有りとぞ 遠鏡の所に 東路の方に名丁寧の実の名ハ君を都に

注めと成りこと和ハ云通し同所平方と云所に錦堀と云有りとぞ 何の
堀也 坂屋 板屋坂 樣沢 高瀬 寄井 大久保 山中 異鴻雄
下野の方ハ 玉津 磯 渋奥の方ハ 伯吉之●白坂より白河へ一リ▲六十五 廿三丁●四十四
皮竜の際 今 商人 吉田 信高が墓有り 右の方 実山 尺西 岩の二
所の実之とぞ今ハ 浦 野と云 さいさ家 此実山の麓に 秀衡 陣と
云所に 義経 西国 奥の所 此所まで 秀衡 送りしと云 此所 軍 勢 船 之の
歴 さしかたの古 岩のうけ今も古中より 城 あれと 白河の入口たり
の方 山下 風 宮とて 常に 風 吹 如 宮有●白河より根田へ一リ▲三十四 ●廿三
野 南の茶屋ハ 弱の中之 実川 寺と云 九尾の楓をとぞ 葛蒲沢
名ハ之 山 号 寺内ハ 茨の上の堀と云 八 鶴 神 義経 勧 請 子

那須原●太田原より鍋屋へ二リ十丁▲百二十六町の中口にさび川と云番橋有り
上野平 ちかぶと みまじ 一の沢 祢りの木 沢田小町と云 沼 むざる
鍋屋川●あべ屋より越堀へ六丁●越堀より芦野へ三リ▲百二十六杉にて戸
一本柄と云坂有り 寺子 ちかぶ川 石田坂村 まさ川橋有り 地沢
だんや坂 黒川 茶屋有り川も有り こやうじ●芦野より白坂へ三リ十丁
▲百十六 ●二十二 底根村は東に極り郡の鏡山と子山の郡にて東北を西り

又宿出口河越張川つゝじが是 様が是 廉湯の来れ こゝて孫四本れ
美の目の橋 白川より たゞ小 鄙浮路有り 川田村 二の来八幡大社
八幡ヨリ郡より 此事世ゝ源家の棟梁の事附状今に有りとぞ ● 根田より小田
川へ サ ▲廿四 七ア ●十七 大清水とて大石のやうより 智泉有り 七曲坂 行家若ノ此所
の田螺ハ穴ゆきて売者りと云 ● 小田川より古田川へ 十三 ▲十二 丁 ●九 鳥沛 稲荷
の社山上に有り 此男ハ石の大佛有り ● 大田川より 踰瀬へ サ ▲十九 丁 ●十一 ● 踰瀬
より大和久へ サ ▲廿一 三ア ●十四 このゝ 堂有り 浮の石雅漢有り 五百羅漢有り 其ゝ人家
見れハ羅漢に似たる事也 弘法の縁と云 今塚とて大多浮有り 雲
山隆し 甲子の湯とて温泉有りとて ● 大和久より 彰田へ 十 ▲十一 一ア ●八 ● 彰
田より 矢吹 十 ▲十 二ア ●七 ● 矢吹より 久来石へ サ ▲廿四 三ア ●十七 るの尾崎と云 瀬ゆり

● 久来石より 芝石へ 十 ▲十五 三ア ●十一 ● 芝石より 須賀川へ 丁 ▲四十七 ●三十一 芝石社 新沼彰
田此地を往来するを卯より見れハ水を磯立て 水中を潜るやうに見ゆるとぞ
● 須賀川より 笹川へ 一丁 ▲六十 廿五ア ●三十七 二階堂 遠江守 為氏居城の所有り 岩の名
川名 岩瀬の来れ小鎌先 鎌先 鎌先 鎌先 里人西四ハ大職冠を祭るまハ何ぞ此来
小大いなる鎌の様て有りしを祭りしとも 数ハ数れ岩瀬の来の風に傳也
せまじ 其ゝの家 後堀の家 大和国 同 家 安川 御代田の
家の川の中に 無石とて 五六ア つゞきて 平なる石有て 石の内白蛇住と云
川より東ハ田村郡 古城有り 早の城と云 利仁 鎌の築和と云 利仁
産湯の清水有り ● 笹川より日出の山へ 十 ▲十六 二ア ●十二 ● 日出の山より小泉田へ 九
▲九 ●七 東の方守山 鎌倉山 太平ると云 有り 田村 建立とぞ 大同 四国の宮

絲の碑が建てゝある　さゞい川　●小栗明神　郡より一里半　十四軒の家あり　祭神詳ならず　古へ横社有り　植武の神宇処暦三年甲申大体の宮称聞及なれども　建立有し社也　●郡より福原へ十八丁　池川　篠田町　杉之橋　嵐の門程と云橋有り　狐塚と云有り　岡村在小野口と云所の東方にて　昔の古墳ならん　子管領の大守と云し人の住しと云あり　岡野　行平亭と云も古墳ならん　●福原より日和田へ十八丁　矢矧の社有り　●日和田より一里半　矢矧の社有り　●日和田より一里半　矢矧の社有り　●日和田より一里半

絶而碑不知何とぞ　さゞ川　●小東田より郡山へ　十　▲十四　五十●十　西の方ゆり余淺
香へ鎮社有り植城の御宮延暦三年甲卯大伴の宿祢國乃子勅して
建立有し社也　●郡山より福西　廿　▲廿四　六十●十五　池川　久保田町　杉元橋　嵐乃

武隈川の流れ銃撃石とて鉄にて撃ける跡の付ける石にて我鎧上流の川
軍勢の通りける所にて我鎧の足跡とて石に人の足跡付けるが有りとて
一の宮　忍城供中の渡を鎧えて行く　栗の洲　白檀観音　箕中
の清水　我家の渇を清遠清水とて　木幡山治陸寺　無天社大社
延喜式に穏渡の社一座とて此社とぞ二本松の東に六本余有とぞ
八町菜屋　中井町　にてら根ハたりの言也　百姓阿達多臘山と云
言にてらの根に沖に麻の有ても何ハいまん孫と云ふね　みちのくの
にてらまゆきたしをさて言しめきかばつゝかゝ事も　みちのくのにてらま
ゆきつるみて　我はぎり人の歌をことなきん　みちのくの山之●二本松より
八町の見　二十　三十三　小坂有る通　天正年中　二本松我鎧と保遠輝宗に

交戦の地也　安達信夫郡の界川とて鎧の流れ有り●八丁の目より西へ
一リ　▲廿五　小丁　●廿三　町中を流るゝ川を天明念川（てこやうねん）と云町の石たりの方古城の跡にて
保遠寛之　塩尾城中当なるゝ人住しとぞ此辺鞍の思と云ふ町をつれ来沢を
有り板谷城と云　浅川●西へより根子町　十　▲十九　三十　●八　右の方山上に八幡の社にて
●糖町より福島へ　一リ　▲五十八　廿五丁　●四十　清水町とも云　伏拝坂藤姫等に　みち
のくの我の河東の川をなぐるゝ　みちの　弟も　七井町　合
の目　太平寺　荒川　深川●福島より湖の上　二リ　▲二十八　八丁　●四十五　此所若八松の
目と云さすべき橋と云橋有りとぞ今ハ千橋ばんかの人に　若此所に大日葉
を安置して其所に沢有り此沢に橋をんとて此所の大松を切れ木屑の
集り一夜の間に元の如くなる所の者すべきやうなく浮かハ屑を蟻接ける

がとて漸く倒しぬ大勢にて足をしんとするに如もうごかぬ事なり
りの事に覺て河ゆうさてやきしにまより悔くなりて此本にて是なる橋之
とぞ居ぬと小路の内本河岸と米沢河岸の間の小橋なりと云人も有
大日ハ今の城の西追手の内之とぞ　東の山獄坤の方に見る思山是れ之
御しひ山も此辺とぞ　なしくひの表の玄の墓敷ぬとも此の山の松
ぞ書なり　見ても此ひ見ぬても此ゆを得るとハ西方一ツに拘此ひ山
人麿の事之　思山ハ今の雅思山之　思山志のびて要ハ今人の
心の奥も見えく　毬川　松川　あはれ志山ハより東見る文治年中
義衡が塞を築し不之　此辺鎌田と云ふ所に児が墓と云有り是れ江の
鳴児が渕にて身をなげし白菓が墓とぞ　月の輪の御所と云ふ所有り此ハ
の徑しるや　石が表　鯖野　飯坂ハ信夫山より行べし
●瀬の上より　桑折へ一リ　▲甲云　●辛　文字橋石へ行ハ太の方
有り　灵山獄ハ東の方ちるかり　見る山上山麓の社有り
梵を大石村と云ふ灵山ハ法一法師の冥山とぞ此山の塔を
雪山が獄と云ふ利仁将軍　東夷征伐の時此山に城を築
徑強ひしとなり　其塔ハ小畠野遠にも見えをハ世とぞ今
も礎の御井など殘りて有りとぞ　白根此不ふ文冥上人の
墓とて有り●桑折より茂田へ一リ　▲辛三　●廿三　うつて山町の西の方
小有り　君を思ひ志の山の里より来て見れハうつての山の本陰
にはなり　町の中たりの方のちに鯨舞塚有り　苞莊篇の石

九海の始や 奥乃田桂家 此鎮舞を埋し塚也
の松原ハ此所有たりの事也 攀浪山 銀山也 押への実 此
山の内とぞ 雲路ハ押への実の河ませバやすくハ下の
海さらほし 海鎮ち 彩雉の像有 ● 茂田より貝田へ 一リ 七十
▲三十三 ●廿三 町のたり 麻絶の社有り 茶師堂有り 瀬川と云有り 九
上に瀬有りぞ 無茶が硯石とて乃のたりの思に大石の上に浮
る有り 兼理の 瀬是松 其も乃のたりの思也 武見山
大本戸の説 下鋤の実 ● 貝田より 越河へ 廿 ▲卅九 ●卅 ● 越河
より 秋川へ 一リ 十六 ▲卅六 ●三十四 山の林中に山嶺明神と云社有り 処社或り
山城国 酒解の神社 一座 山嶺明神と号と有り 仙基紀

の場とて 小川有り 乃の傍に大仙石とて 仙を刻る石有り
瑠璃が沼 鎧坂 鐶磨石 足も鎧摺と云 大の方 茅屋に依
義兄弟の妻の像有り ● 秋川より白石へ 一リ 十六 ▲卅七 ●三十六 入口の川に孫
左衛と云 蛍有り 此辺より荊田の郷見る 此山に蔵王捨現
の社有り 木の人ハ蔵王が郷と云 昔人 早ればの山と云 常に煙
の立也 みちのくの河 西川の河にまぐ人 早ればの山ハ公也
き ● 白石より荊田へ 一リ 廿六 ▲卅七 ●三十九 仙基家臣 片雲の城也 町地左衛
小松川と云有り 多きき時ハ上の方へ五十年とりて赤石山の見
由る石を下り 瀬に瀬りて辺とぞ 但吉山 白石川を隔て 岸に金を
石の踏る 桜河のわめづりて 黄魚也 児桂川 荊田明神

九海の始や　奥乃田植哉　此紙冊を埋し歟　菖
の松原ハ此不分たりの事也　攀浪山銀山也　押への笑ハ
山の内とぞ　雲路ハ　押への笑の何ませバやすくハ人の

小の方林の内より有り 東の方天皇を祭ると云 十社の権現
田の神の森より勧請と云へり 又有 名木のくすを
見ましみものくすの横の中より湧出き 一の実も国名
有りそで 古来筆除村の内とて 伝唱の霊も白
菅のまつや除雪こめてくり 麻溝掛場 海を隔て宮
浦の宿二つはしめて有り大里をいでさる山と云
赤坂山迄たての少間川流るたり小の屋敷とおてあく岩のうき
有りさ 飛石 筆ノ先 つらゝ岩屋のごり 現照
寺私のとい有り 桃山 この内館をいふ未有り大里名 前田
三軒も里合が湧 赤坂と呼ふ説 高座有り 合

卷之四

湧水 大の字 一り 大の字 天王社 白旗弥と云有り 大山の字 一り 弁財天 一り 弁財天 一り 弁財天

川の橋のこゝに有り　畑の内　たうの山の上に弘誓寺と云有り　柾葺
如町民家の形ふ柳の巷をあく柾ふり　長谷（間）岩沼ふり一里
斗ゆき一つ森の茶ふり小川ふ添ふ行ふ行ふ行

山之山の形ちかくうつくしき山なり　この城跡　社(やしろ)あり　本(もと)の社(やしろ)の表
うつくしき城の跡　その高さ　八仞(やつひろ)　侍(さぶらひ)の居(ゐ)
もとの城跡にて　木のしげり　八仞(やつひろ)　矢倉(やぐら)の業平(なりひら)
兵(つはもの)の松(まつ)もむかしながらにて　城跡(しろあと)
中(なか)の上の方(かた)を城(しろ)ともいふ　社(やしろ)の跡(あと)
れば杉(すぎ)ある郭(くるわ)の間(あひだ)より　松(まつ)のはえたるまで　高(たか)すぐ
釈迦堂(しゃかだう)春嶺(しゅんれい)　てじが岳(だけ)天狗(てんぐ)　おもやてじが岳(だけ)
ばかりのすきとおるようなる　滝(たき)　二月(にぐわつ)の名残(なごり)の山(やま)
岩(いは)や　仙峯(せんぽう)の雪(ゆき)まだふかく　二月(にぐわつ)の名残(なごり)の山(やま)
なまじいな山(やま)まだ雪(ゆき)を頂(いただ)きて

東照権現御社別当法楽山

妙高院　大梅寺(だいばいじ)　名所(めいしょ)旧跡(きうせき)の境内(けいだい)　延命山杉(えんめいさんすぎ)の木(き)あり
高(たか)さ十抱(とかかへ)杉(すぎ)とも
汲(くみ)たる御茶(おちゃ)　五百羅漢(ごひゃくらかん)
る奉納(ほうのう)銭(せん)　御前(ごぜん)立(たち)の図(づ)の額(がく)
ま荷(に)北斎(ほくさい)筆(ひつ)　七幅(しちふく)

●塩竈(しほがま)　長町(ながまち)　すすぶり　四里(よんり)　名所(めいしょ)　海(うみ)
汲(くみ)　茶町(ちゃまち)　名酒(めいしゅ)　びくに坂(ざか)　今市(いまいち)　市(いち)
沖(おき)の井(い)　八幡村(やはたむら)　市(いち)　村山(むらやま)　不老(ふらう)の御酒(ごしゅ)
別(べつ)かもう　十寿(じゅじゅ)の里(さと)　真(まこと)の細工(さいく)　市(いち)　村(むら)　十寿(じゅじゅ)の里(さと)
酒(さけ)　十寿(じゅじゅ)の里(さと)　久(ひさ)　市(いち)　村(むら)　十寿(じゅじゅ)の里(さと)

まてこれを河めるが十分廣ふ河むとなり　浮橋　野田の郡川　[illegible]
沒丸こしてみちのくの地田の郡川ふるかゝ　来の松山見也　[illegible]
といふ有り　昔男女有て来の松山をさしてちかひたる云の[illegible]
浪の[illegible]ぞ[illegible]と[illegible]なるが[illegible]こと心の[illegible]より人の心の[illegible]
浪[illegible]とハ[illegible]　[illegible]有り是より塩竈へ
紅葉の橋　野田の橋とも云　[illegible]　朽[illegible]地田の入江の丸木橋[illegible]
[illegible]　緒絶の橋　[illegible]　白[illegible]の緒絶の橋の[illegible]
[illegible]　塩竈より松[illegible]小[illegible]里余東南より沙入りて
[illegible]
●松[illegible]塩を[illegible]今市より四里[illegible]町より今市まで[illegible]里余[illegible]

六里余　今市　佐野原　新田町　利府　[illegible]村　赤沼沼有り
松嶋　松嶋より[illegible]の山へ　[illegible]里余　[illegible]の山大仰ちと云　[illegible]
[illegible]山より見れハ松嶋塩竈までの[illegible]見[illegible]の[illegible]
●塩竈より松[illegible]ハ[illegible]里余[illegible]ハ[illegible]
●松嶋より[illegible]花山見
[illegible]
●松嶋より一[illegible]の[illegible]　小松嶋　[illegible]嶋　[illegible]嶋　[illegible]嶋　[illegible]嶋
法[illegible]嶋　蛇嶋　[illegible]嶋　是を八嶋と云　梅が浦　竹が浦　[illegible]
浦　[illegible]浦　[illegible]浦　久[illegible]浦　[illegible]浦　是を七浦と云
[illegible]嶋　二[illegible]嶋　[illegible]嶋　[illegible]嶋　[illegible]嶋　[illegible]浦嶋　[illegible]嶋
[illegible]嶋　是を八嶋と云　[illegible]松[illegible]一[illegible]

一 壷の碑の事 去より上ゟ壹人幅三尺

西 (此ゟ壹尺)

多賀城

去京一千五百里 (此ゟ三尺七寸)
去蝦夷國界一百廿里
去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里
去靺鞨界三千里

此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勲四等大野朝臣東人之所里也天平宝字六年歳次壬寅參儀東海東山節度使從四位上仁部首卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝猶修造也
天平宝字六年十二月一日

みちのくのいまて君ハ元ぞ志ゐ去つしとまつぼのいしぶ 朝鶴如の歳人
神亀元年ハ人皇四十四代聖武帝元年元文三年戊午まで四十五
年なる天平宝字六年より同年まで九百七十六年之此碑 七年に埋れ

てありしを八十年平 [illegible] 堀出しなりとて



石のうつ形 [illegible]

延享弘年乙丑 [illegible] 堂の主人 [illegible] 書を大恩 [illegible] 下
り取得

白玉
京都書林
武江書肆

堀河錦上ル町
西村市郎右衛門
本町三丁目
西村源六藏板

蝶の遊附録終

民家分量記　常盤貞尚作　全五冊
士農工商の勤持ひ切ひ
ひらくなるべしるす

野總茗話　同作　全四冊　右ノ後篇
神儒佛の大意をひらく
なるべしるす

田舍莊子外篇　佚齋樗山作　全六冊
[illegible]
世の苦楽ッしるす

河伯井蛙文談　同作　全三冊　右ノ後篇
[illegible]
同く人の人上をとく

天狗藝術論　同作　全四冊
劍術の奥義をあらはす
法藝は深秘と論ず

六道士會録　同作　全五冊
武家のんは并に人平生の
[illegible]
[illegible]

英雄軍談　同作　全五冊
他國世にしてあるべし軍の
奥義をしるす

古今智慧枕　河内玄宅輯　全三冊
[illegible]の重宝なる仕事の
[illegible]をしるす

民家童蒙解　貞尚作　全五冊
分量記の後篇人はおしへ
并に孝行の物語を記す

江戸通本町三町目　西村源六

新後明題　栅風集　全四冊　新明題
近代の[illegible]
拾ひあつむ

正運紀略　大吟達伐吉作　折本一冊
正代年号時世の[illegible]
くハーく記す

画圖百花鳥　[illegible]
[illegible]
[illegible]

老子本義　[illegible]　全二冊
[illegible]
[illegible]

宗分禪師語録　全三冊

捷徑辨義　[illegible]　全一冊
[illegible]
[illegible]

大般若經轉讀式　折本一冊

武家軍鑑　全四冊
ひらくなる意入

同　軍談　全三冊
ひらくなる意入

七経孟子考文 全三冊 ひらうちへ
和劇局方 官刻 局方数校ノ其同ニ戸ノ如キアリ且総論指南庶物ノ三篇ヲ増ス 全二十二冊
度量衡考 官刻 組徠作 全二冊 其説代々ノ尺同ヲ考ヘ〳〵記ス
陳臥子明詩畧 南郭考訂 全二冊 明詩集中ノ精要ヲ抄ス
文筌小言 同作 物茂卿ノ論文ノ法ヲ述ヘ 全一冊 学者ノ指南ト為ス
歴代帝王圖 同考訂 長門坂氏ノ著ス 歴代帝王ノ事蹟ヲ図ス 全一冊 解説ノ長短互ニ相伴ヘリ
釋親考 増補 井関隆昌著 伊藤東涯ノ説ヲ増補シ 全一冊 親族ノ称呼ヲ分ツ
愛蓮説 鷹峯筆 全一冊
雑書来柬 同筆 全一冊

中書楷訣 養拙堂憲著 全一冊 筆法ノ玄妙ヲ記ス
俳諧綾錦 菊岡沾涼作 全二冊 発句ヲ集メテ名句ト称スル者ヲ加ヘ并ニ俳士門流ノ系譜ヲ載ス
近代世事談 同作 全五冊 人家用ユル諸物ノ原始ヲ記ス
綾錦後篇 鳥山彦 同作 全二冊 百華撰ニ漏レタル旧知ノ佳句ヲ記ス
俳諧反古拾遺 全二冊
俳諧蘇集 全一冊
同新句兄分 全一冊
同玄々前集 全二冊
同井蛙問答 半紙写 全一冊
泉景堂詩文集 全三冊 名人堂ト地下ノ詩哥ヲ収ム

にはこと 全二冊 採切ノ事 江戸ノ事ヲ大略ヲ記ス
前句萬句帳 江戸紫 談林ノ体ヲ記ス
初学消息集 全一冊 書翰ノ文例ヲ載ス
假名文章 同筆 全一冊 古今ノ文章ヲ抄ス
庭訓往来 同筆 全二冊 大字四行
今川腰越状 全一冊
町家流消息 建設賢文筆 全一冊
万要書札 同筆 全二冊 諸家ノ書翰ヲ抄ス
銀燭帖 全一冊 烏石井生門人

俳諧なでしこ 全二冊 発句ヲ集ム
同霊寶 全三冊 歳月集 月次并ニ各句ヲ集ム
同進能 同作 月次追加全部ノ三ノ一ヲ抄ス
同宮遷 同作 月次ノ追 全三冊
同梅葉 逸之筆 全一冊
同有渡日記 全一冊
同友妻久舛 全一冊
同犬椿集 全二冊
同何某発句集 全一冊
同秋夜の雪 支考集 全一冊